Asahi Shimbun 4/18/90

論壇

日本たたき対処は「草の根」で

理解促進する交流に企業も支援を

横田 啓子

「日本たたき」――これほど在米邦人に脅威の言葉はない。米国に長く住むほど、根深い人種差別に不快な経験をする。この人種差別と経済摩擦による日本たたきが相乗して、邦人の生活にどんな悪影響を及ぼすか、危惧（きぐ）せずにはいられない。日本たたきへの対処は、日米関係改善のためだけでなく、在米邦人の安全確保のためにも緊急の課題である。

そのためには、草の根の交流が最も必要である。最近、日本の経済界が外国の「草の根活動」への支援に関心を示し、米国のアイゼンハワー財団の防犯組織づくりに寄付することにした。企業による努力の一歩として評価したい。さらに、企業が学校での日本学習教育や一般向けの多様な文化的行事へも援助を広げるよう望みたい。これまで教育面への寄付は、日本経済のためになりそうな大学講座等に偏っていたと思われる。

米国では国際理解教育の一環として、また有数の影響が及んでくる国として、小中高校で日本学習が盛んになった。マサチューセッツ州西部にある五大学共同出資の東アジアセンターは、小中高校向けの日本学習教材を収集し、貸し出している。毎日三、四件の注文があり、一カ月前から予約しなければならないほど要望が多い。

このセンターは、教師の日本学研修もしている。希望者は増える一方だが、財政難で新しい教材を購入できず、人手も足りない。こうしたセンターは、全米に大学の根関としてあるが、予算は補助金と民間の寄付に依存するので少なく不安定でもある。

日本を紹介する教材の開発研究、購入、教師研修への援助は、直接に地域住民と将来を担う米国民の日本理解を促し、友好を育てる礎になる。この種の草の根の友好こそ、在米邦人の安全を守り、ワシントンの議員の意向をも動かすことに通ずる。

私の住む地域で、住民の日本への関心は高い。しかし、その関心は「好奇」からではない。日増しに圧迫感を加えてくる日本を、何も知らないから知りたいのである。まだニュートラルな住民の関心を、友好的なものに育てるか、敵意に満ちたものにしてしまうかは、ここ数年間に日本人がどれだけ日本を知ってもらう努力をするかにかかっている。その内容も伝統芸術だけでなく、ふつうの日本人の暮らしを紹介し、喜怒哀楽を分かち合う友人になれることを伝える必要がある。

その意味で、三月に当地の大学で行われた日本ドキュメンタリー映画会は、大好評だった。財政難で一時開催が危ぶまれたが、米政府、日本総領事館、国際交流基金の協賛で実現した。映画は、マスメディアでは伝えられない日本社会の多面的な姿と、人々の苦悩や喜びを描いていた。聴衆は日本人も同様な問題を共有し、よりよい未来を求めて努力している人々の姿を知り、日本人に親近感を持ち感動した。

日本から羽田澄子、姫田忠義両監督が来られ、上映後、聴衆との語らいが連日夜遅くまで続いた。羽田氏の「痴呆性老人」に感動した看護婦は、羽田氏に自分の働く老人専門病院を見せ、日本の病院との交流を望んだ。姫田氏のアイヌ民族の映画を見て、工芸技術を習いたいと言いだした人、自国文化との類似点を指摘し「私たちは親類だ」と笑いを誘ったフィンランド人。ダムの底に沈んだ「越後奥三面」の映画に、銀髪の女性は「敬けんな美しい人に会えた」と感謝した。

映画会は、日本紹介から心の交流の場になった。これだけ深まった日米の間で、こうした交流がなかったことが不自然なのだ。偏見も脅威も、無知から起こっていることをかみしめたい。

（米アムハースト大学講師・日本語、33歳）